



Title	辻脇葉子先生に贈る言葉
Author(s)	手塚, 明
Citation	明治大学法科大学院論集, 25: 251-255
URL	http://hdl.handle.net/10291/22560
Rights	
Issue Date	2022-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

辻脇葉子先生に贈る言葉

手 塚 明

辻脇葉子先生は2022年3月末をもって本法科大学院（法務研究科）をご退職されることになりました。本来であれば、数年後に古稀をお祝いするとともにご退職の慰労をすべきところ、少し早くご退職されますことは、やむを得ないご事情によるものと頭では理解しておりますが、大変寂しい気持ちであります。辻脇先生には本当にお世話になりました。本法科大学院の教員は皆同じ気持ちであると思います。同僚教員を代表して、辻脇先生に心から感謝を申し上げたいと思います。

辻脇先生は、別掲のご経歴にあります通り明治大学法学部をご卒業になり、明治大学大学院法学研究科公法学専攻博士前期課程・同後期課程で学ばれた後、1982年4月に明治大学短期大学助手に就任されて以降、主に明治大学短期大学で専任講師、専任助教授、専任教授として教鞭を執られ、2004年4月に同短期大学が情報コミュニケーション学部へ改組されてからは同学部専任教授となられ、2008年4月に本法科大学院教授に就任されました。そして、この度2022年3月末をもってご退職になられますので、40年間にわたって明治大学で教鞭を執られたこととなります。

40年間の大学教員生活の中で、情報コミュニケーション学部新設と本法科大学院への移籍は、辻脇先生にとって大きな出来事であったと伺っております。

2004年4月、短期大学が改組されて情報コミュニケーション学部が新設されましたが、同学部新設に当たり、当時辻脇先生は短期大学法律科長の立場にありましたから、正に新設準備の中心として、学部の理念や設置科目を検討し、大学内での説明や文科省との相談、広報活動（ホームページや入試ガイド等の

作成)など多くの作業に当たられました。そのときに執筆された、同学部ホームページに掲載されている「教育目標及び3つのポリシー／概要」「例えばこんな視点で社会が見えてくる」にあります「なぜイラクは『悪の枢軸』でなければならなかったのか?／なぜウルトラマンは3分間しか戦えないのか?／恋愛と法をめぐるコミュニケーション／シャーロック・ホームズは、情報コミュニケーションの達人!」の4つの文章には強い思い入れがあるそうです。私もホームページにアクセスして読ませていただきましたが、4つの文章は、同学部の教育目標をわかりやすく伝えており、多くの高校生に同学部に入学して学んでみたいと思わせる名文であると思いました。

2008年4月、辻脇先生は本法科大学院に移籍されましたが、移籍により一種のカルチャーショックを受けられたと伺っております。2008年当時は、まだ法科大学院生の中に旧司法試験受験経験者が一定数いました。おそらくそれに起因するのではないかと推測されますが、授業内容に対して批判的な(あるいは攻撃的とも思われる)反応を示す学生が複数いることに大変驚かれたそうです。彼らは予備校で教えられた内容と異なる授業をすると、授業中のみならず授業終了後にも(かなり攻撃的な態度と受け取れる様子で)質問をしてきました。彼らの言う予備校での指導内容をじっくり聞いてみると、明らかに通説・判例とは異なる見解(誤った理解)でしたが、その誤りについて文献等を示しながら論理的に説得するためかなりの時間と労力を費やされました。予備校の影響力の大きさ(弊害の大きさ)を実感されたそうです。他方で、司法試験合格という目標があることから、学部の学生と比べて勉学意欲が高く、授業中の居眠りや内職(文庫本を読んだりスマホを操作したり)をしている学生がほとんどいないことには良い印象をお持ちになりました。また、授業中に最高裁調査官解説や参考文献を紹介すると、それを読んだ上での確かな質問をしてくる意欲的な学生が何人かおり、学生との対話は刺激となり、授業に取り組む原動力ともなったそうです。私も2007年4月に本法科大学院専任教授になりましたが、あの頃は、本法科大学院も1学年の定員が200名の大規模校でしたので様々な個性を持った学生がいたなと懐かしく当時のことが思い起こされます。

辻脇葉子先生に贈る言葉

辻脇先生は、現在では攻撃的な態度を示す学生はいなくなり、良くも悪くも大人しい学生が多くなったけれど、それは、勉強意欲の高さと相関するとも思われ、定評のある教科書をじっくり読まない学生も多く、予備校本ばかりに頼って論証パターンを暗記するという効率性を求める学生が多くを占めるようになっていのではないかと懸念されておられます。学生にとっては、予備校本や論証パターンによる学習は一見「効率的」に思えるかもしれないけれど、司法試験合格への途としては、かえって遠回りに見えてならないとの思いをお持ちです。授業で参考文献（決して難しい学術論文ではなく、法学教室や法学セミナー等に掲載されている解説など）や、判例理解に役立つと思われる最高裁調査官解説を紹介しても、それを実際に読む学生は少なく、意欲的に（貪欲に）学習するという学生はごく少数になっているのが大変残念だとお感じになっておられます。

辻脇先生は、少数とはいえ、意欲的に学習する学生との対話は、相変わらず授業に取り組む原動力となっており、他方で、すぐには芽を出し花を咲かせるようには見えなくても、いつかは芽を出すであろうと「待つ」つもりで、授業では種を蒔くことに取り組まれてきました。司法試験において求められているのは、暗記した情報量の多さではなく、基礎知識の確実な理解、およびその基礎的理解に基づいた論理的思考を駆使する能力であることを学生には意識してほしいと授業では繰り返し伝え、「法がそれを原則とした理由は何か?」「なぜ例外が認められるのか?」「そうすると?」と、自ら問いかけ思考する学習姿勢が重要であると説いていらっしゃいます。

私が存じ上げていることはごく限られているとは思いますが、辻脇先生は、講義でも演習でも、学生一人一人の理解度を把握しながら、学生に寄り添うように丁寧に説明され、学生が提出したレポートには詳細なコメントを付けて返されていました。辻脇先生が作成されたレジュメは、多くの修了生から、「刑事訴訟法は、司法試験本番直前に見直したのは辻脇先生のレジュメだけだった。これをきちんと読んでいたので、自信をもって本試験に臨めた。」との感謝の声を聞いております。また、学生が辻脇先生のレジュメに多くの付箋を貼った

り書き込みをしてしっかり勉強しているのを見ております。近年はコロナ禍のためにオンライン授業となり、学生の姿を校舎内で見える機会は減ってしまいましたが、対面授業を行っていたときは、いつも授業の合間の休み時間に多くの学生が辻脇先生に質問をしている様子を見かけておりました。私も少しは辻脇先生を見習わなければいけないと思いつつ、なかなか実践できていないのが正直なところです。

辻脇先生は、どうすれば本法科大学院の修了生の司法試験合格率が上がるかを常にお考えになっておられました。司法試験において求められているのは、基礎知識の確実な理解、およびその基礎的理解に基づいた論理的思考を駆使する能力であり、また応用力・事例分析能力の涵養は、基礎的知識・理解という土台があって初めて可能となるので、教育方法・教育内容・教材についても、最新の判例や難しい論点などについての情報提供ではなく、基本的な条文の趣旨、制度趣旨、基本原則などの基礎的知識の確実な定着を目指すことが重要だと考えておられます。

私は、刑事系実務家教員として本法科大学院に採用されましたが、実は、刑事訴訟法を他人に教えた経験はなく、2007年4月の授業開始前にはとても不安な気持ちでございました。同年3月にFD研修会に参加させていただきましたが、そのときに、法科大学院の学生の様子やどんな教科書を使えば良いかなどを丁寧に教えて下さったのは辻脇先生でした。当時、辻脇先生は兼任教員として本法科大学院で刑事訴訟法演習をご担当でした。そのとき以来、私は辻脇先生を頼りにさせていただき、学生への教育・指導では、辻脇先生をお手本とさせていただきます。お手本とさせていただいたと言っても、到底、私には辻脇先生と同じレベルで授業を行うことはできず、容易に到達することのできない目標とさせていただいていたというのが実情です。辻脇先生は、私が最も尊敬し信頼している法科大学院教員です。辻脇先生の示された法科大学院教員としての姿勢や情熱を少しでも受け継ぎ、本法科大学院を法曹養成機関としての法科大学院に負けない存在にして行かなければならないと思っております。

辻脇先生の研究者としての業績についても少し触れさせていただきますと、

辻脇葉子先生に贈る言葉

別掲の研究業績の通り多くの著書・論文がありますが、不勉強な私も、明治大学法科大学院論集に掲載された論文は読ませていただいております。いずれの論文も最高裁の重要判例について、現行の刑事訴訟法の母国ともいべきアメリカ合衆国における学説・判例に照らして分析・検討され、実務に対する有益な示唆を導いておられます。辻脇先生には、是非とも研究を継続していただき、今後も論文を発表していただきたいと切に願っております。

ご退職になられても、きっと辻脇先生は本法科大学院の行く末をずっと気に掛けて下さることと思います。どうぞいつでも遠慮なくご来校いただきたいと思います。そして、今後も学生にも我々教員にも暖かい叱咤激励を賜りたいと思います。辻脇先生の今後益々のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。